

卒業研究

たまたま日本人じゃなかっただけ —いくつもの国籍にまたがった多文化家族のアイデンティティー—

慶應義塾大学法学部政治学科 4年
塩原良和ゼミ 山本杏奈

〇はじめに

先日、我が家でクリスマスパーティが行われた。母の仕事仲間たちとそのファミリーが 20 人近く集まり、ワイン片手にビンゴ大会で盛り上がり、日本語だけではなく、フランス語やイタリア語も飛び交っていた。

私は高校を卒業してすぐ、生まれて初めてパスポートを取って、パリに旅行に行った。そして、フランスにはなんと外国人が多いのだらうと驚いたことを覚えている。それまで抱いていた、“みんな金髪背の高い西洋人”というフランスのイメージと、実際にパリの街で見た光景とはだいぶ違っていったからだ。その時、フランスという国が移民や外国人が多く住む、“多文化社会”であることを知った。島国である日本の中には、わからないことや気づかないことがたくさんある。大学に行って国際社会学を勉強しよう、そう思って慶應義塾大学に入学した。そしていま、“多文化社会”は決して遠い外国の話ではなく、日本の問題でもあるということを学んでいる。

まさに、わたしの目の前でビンゴに一喜一憂している彼らの国籍やバックグラウンドをみるだけで、日本ももはや“多文化社会”になりつつあるということが実感できる。イタリア人と結婚してトリノに住むアヤさんとその息子のリッキーは、イタリア語で親子げんか。お腹の大きなトドロキさんは、スペインにフラメンコ留学をしたときに知り合った太鼓奏者のご主人と結婚し、両国の靴屋を営む。10月に挙げた結婚式のアルバムを広げるのは、ワタナベさんと中央アフリカ出身のフランス人ロメオ。以前ハンガリー人の彼がいると言っていた母の同級生など…。気が付くと、母の仕事柄、まわりは多言語、多文化が当たり前ようになっていた。

何年か前に映画化された「ダーリンは外国人」（小栗佐多里・著 メディアファクトリー 2002年）というマンガのヒットによって、日本では国際結婚が話題となった。この映画の中で、本物の日本人と外国人の国際結婚カップルが何組も登場するのだが、わたしの周りにも国際結婚カップルが多い。しかもよく聞けば、それぞれが結婚に至るまでの独特のストーリーを持っている。大学で中国語を学び、留学した中国で留学仲間のイタリア人女性と恋に落ち、そのままイタリアまで追いかけて、イタリア語がひとことも話せないのに、彼女の住む人口 2000 人のイタリア北部の村に住んでいる男性。子供時代にお父さんの仕事で西ドイツに住んでいて、そのときの隣家に住んでいたスロヴェニア人の息子と大人になってから再会し、結婚したスロヴェニア在住の女性。彼女と夫の共通語はいまだに英語だ

という。10歳になる息子はお父さんとはスロヴェニア語、お母さんとは日本語で話すが、英語は話せない。でもお父さんとお母さんが話している英語はほとんど理解しているとか。ある日、東京で電車に乗っていていきなりドイツ人男性にナンパされたら、その男性がオペラ歌手で、その舞台にほれ込んで結婚した女性もいる。

そのなかで、わたしは今回、国籍とか言語といった点において複雑な背景を持つパートナーと国際結婚をした3組に会いに行き、話を聞いた。これはその記録である。

その1

ワタナベさんとロメオの物語

ワタナベさんは、4年前から母のアシスタントのような立場で仕事をしていました。非常に穏やかで一見おとなしく、外国帰りといった派手な感じがまったくない。フランスにロメオというアフリカ人のフィアンセがいるという話を聞いていたが、黒人とワタナベさんというカップルがなかなか想像できなかった。

ある日、ロメオが東京に来て食事会をすることになり、私も同席した。少し遅れてやってきた背の高い黒人青年は、入ってくるなり「みなさんこんばんは。ロメオと申します」とニコニコしながら流ちょうな日本語であいさつした。それから、「どうぞ、ここに座って」と真ん中の席に促されたロメオは「恐れ入ります」とこれまた流ちょうに答えた。「今どき、日本人の若者で、・・・と申しますとか、恐れ入りますなんて言える人いる？ 私たちの世代だって言えないわよ！」。と母が言うと、ワタナベさんが少し恥ずかしそうに言った、「私が教えたわけじゃまったくないんですけど」

ロメオは、あいさつだけでなく、終始丁寧でにこやかで本当にいい人だった。初対面の誰とでも話を合わせられ、ある意味、その場にいた誰よりも“日本人ぽかった”

ワタナベさん（29歳）は、東京で生まれ育ち、白百合女子大学の仏文科でフランス語を学んだ。大学3年の時、フランスのアンジェという街にある大学に一年留学し、そのとき友人を介してロメオと知り合った。

一方、ロメオ（32歳）は中央アフリカの首都バンギで生まれる。2歳のときに、お父さんの仕事の関係でギリシャに家族全員で移り、6年間住んでいた。そしてロメオが8歳になるころ、やはりお父さんの仕事でフランス行きが決まり、以来25年間フランスで育ち、中央アフリカとフランスの2つの国籍を持つ。リモージュ大学で電子工学とナノテクノロジーを専攻し、現在は太陽電池、有機EL、トランジスタなどの研究者として、長野の信州大学に勤務している。

ザワークラフトとカキ以外ならなんでも食べられる、日本食も大好きで納豆も大丈夫、というロメオが日本に興味を持ったのは、アニメの影響が大きかったという。ロメオが高校生の時に、日本のアニメ文化がフランスで流行し始め、ゲームにも熱中した。日本のゲームソフトが翻訳されてフランスに輸出されるまでには、半年以上かかるが、それが待てなくて、仲間たちと直接日本語のソフトでゲームをやるようになった。「ファイナルファンタジーとかやったら、いろんな言葉とか字がわかるようになったんですよね」。そして、本格的に日本語の勉強を始めた最初の目的は、2002年の日韓ワールドカップに行くためだったという。「ワールドカップも行けるし、ゲームもわかるようになるから、これは”一石二鳥””と思って、じゃあ日本語をやろう！って友達と…」そういうきっかけで、日本語を勉強しているうちに、ゲームだけではなく、日本の文化とか人とか、そういうものにも興味を持つようになったそうだ。そして、ワールドカップという目的はすっかり変わり、長崎の外国語学校に留学した。

そしてロメオは、フランスに帰ってから、日本語を学ぶために通っていたアンジェの学校で、ワタナベさんと出会う。当時からロメオは、果敢に日本人には日本語で話しかけていたらしい。ワタナベさんとの会話は、はじめはフランス語と日本語が半々くらいだったが、日本で2人暮らしを始めてからは、ほぼ日本語なのだそうだ。

母語は何語ですか？という質問に、ロメオは少し考え込んだ。ロメオが生まれた中央アフリカではフ

ランス語が公用語だったが、幼少期はギリシャにいたため、ギリシャ語も話していた。さらに、双子の兄との間では、両親が使っていた中央アフリカのサンゴ語でも会話できるという。「実際に家庭で何語をしゃべっていたかはちょっと覚えてないな。」

ところで私は、恥ずかしながら、ロメオに会うまで「中央アフリカ」という国名を聞いてもピンとこなかった。どうやら日本人の多くが「中央アフリカ」というのが国の名前だとは知らないらしい。6年前、ロメオは成田からフランスに帰るときに、空港のパスポートチェックで止められたそうだ。どうしたんだろうと待っていたら、係の人が中央アフリカという国が本当に存在しているかを調べていたという話もある。もっと驚いたのは、エジプトでの出来事。エジプトの空港でパスポートを見せたら、「え？そんな国ある？」と言われ、軍隊（おそらく自衛官）の人が集まってきたそうだ。しばらくしてキャプテンのような人が、そういう国ありますよーと決まり悪そうに出てきて、無事に出国できたとか。「え？まじでー？エジプトってアフリカじゃないですか。いやー驚きましたね。」と話しながら、ロメオは苦笑していた。”中央アフリカ”という名前が地域を指しているようで、国名だとイメージしにくいのだろう。ロメオは言う。「ヨーロッパでも、誰も中央アフリカを知らないくらい。たまに知っている人がいるけど、でもどんな国？みたいによく質問されます」。

でもロメオは、その“有名じゃないしあんまり人気のない”中央アフリカという祖国についての話になると、嬉しそうに語ってくれた。2年前に30年ぶりに初めて祖国に帰ったそうだ。おじいさんのお葬式のために家族みんなで帰り、ロメオは熱を出して寝込んでしまったらしいが、それでもすごく良かった、いいところだったという。

「(中央アフリカは、現在) 経済的にはあまりうまくいっていない。9年前にクーデターが起きて、そのたびに学校などが閉鎖されるから、そうしてあまり前に進めない感じ。でもみんな性格的にやさしいというか、穏やかな人たちで、まったく戦争したいという感じがいないから。」そういう国民性は、ロメオの人柄がまさに象徴しているようだった。

「それから、中央アフリカってアフリカの真ん中にあるから、何でもあります。北はスーダンとカメルーンと、こっちはコンゴ、昔はザイルと言われてました。森も多いし、お魚もあります。海はないけど川があります。あと北の方に砂漠があつて、ゴリラとかライオンとかクジラとか・・・あ、クジラじゃなくてあれはなんていうんだっけ、首が長い・・・あ！キリンキリン！」



現在、長野県上田市に住むワタナベさんとロメオのふたりは、昨年（2011年）結婚し、10月に式をフランスで挙げた。フランスでの結婚式は日中、リーガル式と宗教結婚式を行った後、宿泊施設のある会場をまる2日借りて、一晩中パーティ三昧。日本のパッケージになっている結婚式と異なり、何から何まで自分たちで準備する。親戚中が集まって、それぞれブーケ担当、料理担当、音楽担当、飾りつけ担当、招待状担当・・・といった具合に、半年かけて大騒ぎだ。時差が一番大変だったとロメオ。というのも、長野にいるロメオに、毎晩フランスの兄妹や親せきや業者が結婚式の相談をしてくる。「メールで送ったのに、読んでないんですけどー」、「それぞれの人に同じ説明を何度もしなきゃいけないくて…」ド

タバタ劇が目につかぶようだ。さて、そして何料理を出すのかということが最大の問題になった。日本料理にするのか、アフリカ料理にするのか、さんざん悩んだ挙句、結局フランス料理のケータリングサービスに落ち着いたとか。翌日、ロメオの親戚がアフリカ料理を持ち寄り、みんなでバーベキューをした。意外にも、アフリカ料理は日本と近いらしく、モロヘイヤやオクラが入っていたり、干物のおつまみがあったりと、日本人にも大好評だったそうだ。

ワタナベさんの両親はロメオについて、ワタナベさんがフランスに留学していきなり、しかも黒人の彼氏を作ってきたときにはちょっと驚いたようだったが、結婚に関してはそれほど反対されることはなかった。というのも、ワタナベさんの母方の親戚が、アイルランド系アメリカ人と結婚し、アラスカに住んでいて、その子供たちはいろいろな国籍の人と結婚していたりするそうで、そういう意味では普通の家庭ほどびっくりされなかったのかもしれない。それよりも、ワタナベさんの家族はヨーロッパに行くのが初めてだったので、「どうしよう、飛行機で13時間なんてどうしよう、フランス語もわからないし…」といった具合に、そっちの方がずっと心配だったみたい、とワタナベさんは笑っていた。



一方、ロメオの家族は、もともと本人が決めたことを尊重する文化。フランスでは、民族や国境を越えて結婚することは当たり前なので、日本人と結婚するといってもそんなに違和感はない。ただロメオは、結婚式に関しても、「お互いの家族の文化のバランスに気をつけなきゃいけない。もし片方の文化が多すぎたら、もう一方の家族が傷つくから」としきりに言っていた。きっとその結婚式には、彼らしい心遣いがあふれていたのだろうと思う。

直前までてんやわんやだった結婚式は、終わってみれば大成功。最初はそんなに友達をたくさん呼ぶつもりはなかったと言いながら、わざわざ日本からも多くの友達が駆けつけてくれたそうだ。当日は、呼んでいないはずのロメオの幼馴染が4人で、どこかで聞きつけて飛び入り参加したりして、総勢150人の盛大なパーティだった。「みんな本当に喜んでくれて、本当に良い結婚式だった」とワタナベさん。アルバムを上げながら、ロメオは「わたしはすごく幸せでした」と。



ロメオの信州大学での研究は次の秋に終わる。そのあと、日本に残るかフランスに帰るか、あるいは全然違う国に行くかは、まだ決めていない。将来、子供が生まれたら、どんな言語やどんな宗教で育てるかも、まだわからない。そのときどこに住んでいるかにもよるしね。2人ののんびりとした温かい生活は、まだ始まったばかりなのである。でも、ひとつだけ、ロメオには決めていることがある。2人が日本にいる間にならず、ロメオの家族を日本に呼びたい。

その2

タニグチさんとアレックスの物語

※2010年6月、私はスイスのジュネーブを訪れ、マケドニア出身の男性と結婚し現在ジュネーブに住むタニグチさんに会い、話を聞いた。タニグチさんとアレックスの意向に寄り、本章のHPへの掲載を控える。

その3

タカツさんと徐さんの物語

韓国、ソウルの地下鉄2号線のソウル大学入口駅を出て、5分ほど歩いたところに、タカツ一家の住むマンションがある。タカツ篤八さん（53歳）は、愛知県豊橋出身。早稲田大学政治経済学部を卒業し、新聞社に就職。大学時代にテレビで光州事件を知ったのをきっかけに朝鮮語を学び、現在は、朝鮮語のフリーの翻訳家として活躍している。在日朝鮮人3世の奥さんと、今年中学1年生と小学2年生になる娘二人と埼玉に家を建てて住んでいた。しかし何年か前に新聞社を退職し、今年4月から、ソウル大学で朝鮮半島の歴史学を研究するために家族とともにソウルに移り住んだ。

リクエスト通り、たっぷりのじゃがりことチョコレートと、何冊かの女子中学生向け雑誌をお土産に、ソウルのタカツ一家を訪ねた。

この日は土曜日だったため、小学校はお昼に終わる。タカツさんにソウル大学を案内してもらった後、奥さんと合流して妹のユーラちゃんを小学校までお迎えに行った。少し早めについた私たちが校舎の外で待っていると、「おかーさん！」という日本語の声が聞こえた。見ると2階の窓から、友達と楽しそうにこちらに手を振っているユーラちゃんの姿があり、わたしが「すっかり学校になじんでいますね」というと、「なんとかね！」と、タカツ夫婦は少しうれしそうだった。

近くでランチをした後、午後は中学校の授業参観に一緒に行かせてもらうことになった。姉のユーリちゃんを通うのは近所にある私立の女子中学校。大きな敷地に、中学と高校が併設されており、昔ながらの厳しい女子校だという。なるほど、校舎に入ると、みんな長いスカートに同じ髪型をして、今の日本ではなかなか見られない真面目そうな生徒たちが、教室まで案内してくれた。教壇の上に韓国旗が掲げられた教室でユーリちゃんが受けていたのは、保健体育の授業で、パラリンピックのビデオなどを見ていた。私はハングルがまったくわからなかったので、授業内容は理解できなかったが、メモ帳に手紙を書いて、先生の目を盗んでこっそり後ろの友達に渡している生徒がいたり、先生が少し面白いことを言った瞬間寝ていた生徒も起きて、一緒に口をはさんだり…私たちの中学時代とさほど変わりはないそうだった。

しかし、韓国の学生は日本とは比べものにならないほど真面目なのだそうだ。ユーリちゃんから聞いた話によると、友達みんな勉強ばかりしていて、休みの日に友達同士で遊びに行くことはほとんどなく、ファッション雑誌や音楽の話をして、友達みんな興味がないそうだ。そもそも韓国には中学生が読むような雑誌や、中学生向けのファッションブランドもないという。小さいころから3つの有名大学に入るべく、みんな考えられないほど勉強していて、それでもそういう大学に入れるのは一握りの学生だけだそうだ。ユーリちゃんは、1年ほど日本でハングルの勉強をしてからソウルに来た。文字はすぐに覚えられたが、単語量を増やすのは大変だったそうだ。最近は大いぶ授業もわかるようになったが、まだ積極的に発言できるほどではなく、勉強についていくのは難しい。韓国の学校は宿題がたくさん出て、全部やりきれないので、ユーリちゃんはできるものだけやっつけていけば先生も大目に見てくれるそうだ。

授業参観を終え、タカツ夫妻とユーラちゃんとともに一足先に自宅に戻ると、小学2年のユーラちゃんあてに、“こどもチャレンジ”が届いていた。韓国まででも、毎月かならず日本の学習教材が届く。学校ではほとんど漢字の授業がないため、ユーラちゃんはこうした通信学習教材で漢字や国語の勉強をし

ているそうだ。くもんよりチャレンジの方が楽しい！と言って、さっそく封を開けて、じゃがりこをつまみながら、勉強を始めていた。

タカツさんは、15年前に、在日朝鮮人三世の女性と結婚。国際結婚の場合、婚姻届を出しただけでは国籍も苗字も変わらないが、実際は妻が夫の姓を通称名として名乗るケースが多い。だが、二人は時事結婚を選び、奥さんは“徐（そ）”という姓をそのまま名乗っている。徐さんのルーツは日本の植民地時代の南朝鮮（現在の韓国）にあり、いまも南北朝鮮両方に親戚がいる。徐さん自身は日本で生まれ日本の学校に通った。そのため、朝鮮語はまったく話すことができず、祖国である朝鮮・韓国の地を踏んだことは30代になるまで一度もなかった。一方、日本人であるタカツさんは、勉強した朝鮮語を母語のように自由自在にあやつる。また、朝鮮民主主義人民共和国に粉ミルクを届けるためのNGOに参加し、一年に一度は平壤を訪れ、奥さんの親戚にいろいろな物資（ときには現金）を差し入れているという。

朝鮮籍だった徐さんは、ユーラちゃんが生まれてから韓国籍を取得した。国籍を朝鮮から韓国に変えるのは、そう難しくはなかったそうだ¹。在日朝鮮人の多くは、心情的に韓国の方を支持しているから韓国籍に変えるのではない。逆に朝鮮籍を維持している人も、その理由はさまざま。朝鮮民主主義人民共和国を支持している人もいるかもしれない。しかし、ただでさえ外国人であることは日本でとても不便なのに、朝鮮籍だと取得できるパスポートが朝鮮民主主義人民共和国のものに限られ、日本と朝鮮が国交を結んでいないため、さらに不便なのだ。徐さんは韓国籍の方が何かと便利だから韓国籍に変えることにした。韓国パスポートも、韓国籍に変えていなかったら持てなかったし、今ソウルでこういう生活はできていなかっただろうと語る。

日本は本当に外国人にとって住みづらい国だと、徐さんは再三言っていた。結婚していなければ、子供は自動的に母親の戸籍を受け継ぐため、娘のユーリちゃんとユーラちゃんも、日本国籍ではない。日本に戸籍がないため、彼女たちは特別永住ビザで日本に住んでいる。この特別永住ビザの手続きがとても煩雑だそうだ。生後60日以内に届け出を出さなければならなかったり、再入国許可を取らないで海外に出ると、生まれ故郷のある日本に戻ることはできず、その手続きには4年に一度6,000円かかる。タカツさんは、そもそも日本の戸籍制度に反対している。現在、戸籍制度があるのは、世界中で日本と中国、台湾ぐらいである。戸籍制度自体が、差別を生む原因となっていると、タカツさんは言う。

13歳のユーリちゃんと8歳のユーラちゃんに、“友達に聞かれたら自分は何人だと答えるの？”と聞いたら、二人とも迷わず“韓国人”と答えた。だって名前が日本人じゃないから。

二人がこう考えているのは、父親であるタカツさんの考え方の影響が強いそうだ。徐さんがこっそり話してくれた。

「お父さんとしては、お母さんが韓国人でお父さんが日本人で、普通に日本で育っちゃったら、普通の日本人にしかならない。母親のルーツのことを考える機会などが、いまは意識しないとどんどんなくなっているから。あえて婚姻届を出さないのは、戸籍制度に反対しているということもあるが、子供たちを韓国人として育てたいという気持ちがあるんじゃないかと思います。一般の在日の家庭に比べると

¹ 朝鮮籍とは1947年に外国人登録例が施行されたときに、在日朝鮮人の国籍欄に記載された、出身地を表す記号だ。当時はすべての在日朝鮮人が朝鮮籍だったが、1948年に大韓民国が成立して以降、しだいに韓国籍に書き替えるものが増えていった。

特殊ですけどね。」

徐さん自身は、ずっと日本の学校に通っていた。両親は、自分を朝鮮学校に入れるわけではなかったが、朝鮮人として生きろとずっと言っていた。朝鮮人と結婚しなければいけないとも言われ、お見合いをさせられたこともあった。アイデンティティとしては朝鮮人として生きろと言われ育ってきたから、頭ではそう思わなきゃいけないけれど、日本で日本語で育ってきたから、生理的には朝鮮・韓国が祖国だとは思えなかったそうだ。

彼女は30歳になって岐阜から一人で上京。東京に出てきてタカツさんと知り合う。それまでは、通称名の山本という苗字を名乗っていたが、東京に出てきたのを機に、本名で暮らそうと思った。というのも、結局仲良くなると友達に自分の国籍のこととかを話したくなる。でも、とても仲良くなってから、本当は朝鮮籍であることを話すのは、すごくすごく勇気がいることで、そういうのがめんどうくさいと思った。ならば、最初から朝鮮人だとわかる名前をいこうと思ったのだそうだ。東京で、知らない人ばかりの中でゼロからのスタートだったから、その方が楽だった。そのころから時代は変わりつつあったという。東京で就職したPCソフトを作っている会社で、徐という名前を使っていたら、朝鮮語のソフトを作りたいから翻訳してくれないかと頼まれたという。そのあと看護師になったが、看護師になってからも、朝鮮語を話してほしい、通訳してほしいと求められることが何度かあった。結局本名を名乗って、自分が朝鮮人だということを示すと、在日のことなんかみんな知らないし、そういうふうに使われ、逆に朝鮮語ができないことがむしろ嫌なことだと思ったことも少なくなかった。やっぱり韓国に来たら少しは朝鮮語ができるようになるんじゃないかなという期待もあって韓国に来たとか。

タカツ一家は、タカツさんのソウル大学での修士課程が終わったら、カナダに移住することを検討している。そのことについて、はじめは日本に戻る可能性もあったが、原発事故が起きてから、もともと希望していたカナダへの移住を真剣に考えだしたという。

カナダのような多民族国家に行った方が、日本にいるよりストレスは少ないかなと思うそうだ。

なにしろ徐さん自身、在日だということで、小さいころいじめられ、卑屈な性格になっていることが自分にもわかった。自分のルーツのある国なのに自分の国だという気持ちはあまり持てず、韓国や朝鮮半島のことを、嫌なものとか嫌いなもの、苛められた記憶として残っていることが悲しいと話す。子供にはそういうマイナスなイメージを持ってほしくない。幸いにもそんなにいじめられたというのはないけれど、すごくニュートラルな気持ちで、お母さんの気持ちはここ、お父さんのルーツはここってしてほしい。でも日本にいたら、そんなことができないのではないかな。そもそも韓国人のことが大嫌いという人もたくさんいる。ネットではそういうサイトがあふれているし、いまだにそういう人たちがいっぱいいるのを見ると、愕然とした。そういうことを考えると、アイデンティティを作っていくうえで、日本しか知らないで生きていくことは決して良いことではないと思っているそうだ。

最終的に日本に帰ることになるかもしれないが、ソウルの生活もして、カナダのような多民族文化の経験もして、島国という日本を離れて、客観的に見れてから帰ってくる方が、日本に帰ったとしてもその方がいいかなと。

ユ-uriちゃんとユ-らちゃんも、韓国はいやだけど、カナダなら、なんかかっこいいし、いいかなと思う、とカナダ移住に関しては賛成しているようだ。

韓国に来てよかったと思いますか？という質問に、徐さんは在日 3 世として、また母親として悩んでいた。

「難しいな。日本人じゃないけど日本でずっと生まれ育ってきたから、日本を客観的に見られなくなっているところがあったから、そういう意味では外に出て、客観的にみられるようになったかなと思う。長期的な視野で見れば、来てよかったと思うけれど、短期的にはやっぱり異国で暮らすというのがこんなに大変なのかと思いました。

文化という意味では、隣の国だし、ご飯の国だし文法も変わらないし、そんなに違いなくいけるのかなと思っていたけど、これが全然違うんですね。旅行で 2 回くらい韓国には来たことがあるけれど、旅行と暮らすのとは違う。普通ならなくていい苦労もたくさんあるし。夫と二人で来ているならもっと楽しめたかもしれないが、子育てが一番。娘たちはストレスがあっても、お父さんには絶対に言わないで全部お母さんに言う。それはお父さんがソウル大学に留学するために来たからしょうがないと思ってるし、お父さんにそういうことをさせてあげたいと思っているだろうし、お母さんの方が言いやすいというのもある。毎日毎日、娘たちの愚痴を聞かなければいけないくて、自分の身が切られる思い。自分が変わってあげられたらなんていいだろうと思うけれど、自分が学校に行ったらしょうがないし、あんまりがんばりすぎてストレスをためすぎてもいけないし、勉強も手伝えない。2, 3 年生の教科書なら辞書引きながら教えてあげられるけど、中学生の勉強は手伝えないから、それも自分にとってストレス。でも慣れないのはしょうがない。今後カナダでの生活を考えると、日本を離れた異国での暮らしをひとつ乗り越えておくことが、娘たちにとっても大きな経験になると思えばいいのだけだ。」



韓国には、“多文化家族支援法”という制度があって、奥さんがハングルを勉強するサポートをしてくれたりする場所もあるという。

“日本以外の国に住んだことが、人生の糧になればいいな。”というタカツさんと徐さんの願いは、このたくましいタカツ一家なら必ず実ると感じた韓国旅行だった。

○おわりに

小説 “GO” 金城一紀・著の一節より

「ノ・ソイ・コレアーノ、ニ・ソイ・ハポネス、ジョ・ソイ・デサライガード」

「は？」

「スペイン語だよ。俺はスペイン人になろうと思った」

「……………」

「でも、ダメだった。言葉の問題じゃないんだよな」

「そんなことないよ。言語はその人間のアイデンティティそのものでー」

オヤジが僕の言葉を遮った。「確かに理屈はそうかもしれないけど、人間は理屈じゃ片付かない部分で生きてるんだ。まあ、おまえにもいつか分かるよ」

(中略)

「そもそも、国籍なんてマンションの賃貸契約書みたいなものだよ。そのマンションが嫌になったら解約して出ていけばいい。」

「解約なんてできるの？」

「日本の憲法でいえば、第二十二條の二項にちゃんと書いてあるよ。『何人（なんびと）も、外国に移住し、又は国籍を離脱する自由を侵されない』。憲法の条文の中で、一番好きな条文なんだ」

「でも」と《在日朝鮮人》の男が言った。「俺たちがいろいろなことを知ってたって、差別する側が知らなきゃ意味ないんじゃないかな」

「いや、俺たちが知っとけばいいんだ。」と僕は言った。「国籍とか民族を根拠に差別する奴は、無知で弱くて可哀そうなやつなんだ。だから、俺たちがいろいろなことを知って、強くなって、そいつらを許してやればいいんだよ。まあ、まだ俺はその境地には全然達してないけどね。」

これは、小説“GO”の中で、在日朝鮮人の父子がする会話である。著者、金城一紀自身が在日朝鮮人であり、この作品は自叙伝的小説であるがゆえに、父子の会話がリアルなインパクトを残す。

なるほど、“言葉の問題じゃない”つまり、言語が人間のアイデンティティそのものではないという父の言葉は、本当にその通りなのかもしれないと、3家族に出会ってはじめて実感した。日本語で育ち、まったく知らない朝鮮語に悪戦苦闘しているユーラちゃんとユーリちゃんは、迷わず自分は日本人ではないと言う。ロメオのルーツである中央アフリカのサンゴ語は、双子の兄とは通ロメオが、妹は話せない。学校に行ったり仕事をしたり、他者と関わる中でもっとも基本的なツールである言語は、その土地で生活するうえで、かなり重要な意味を持つことに違いはないが、自分が何者であるか、ということに必ずしも影響しないということである。

そしてわたしは、この小説を読んだとき“国籍はマンションの賃貸契約のようなもの”という発想に衝撃を受けた。日本人として日本に生まれ、普通の学校に通っている中では、わたしは国籍こそ、生まれながらに定められた当たり前のアイデンティティのようなものだと思っていた。しかし、それがマンションの賃貸契約だなんて。

徐さんが北朝鮮から韓国に国籍を変えた理由は、少し極端に言ってしまうと“便利だから”。ロメオはフランスと中央アフリカの二重国籍である。しかも、結婚したから日本の国籍をとることもできま

すね、と言うと、「そんなこと今まで考えたことなかったけど、それも面白いね！そうしたら漢字の名前になるのかな」と、少年のような表情で楽しそうに話していた。タニグチさんのご主人も、国籍は“一応”マケドニア人だと言っていた。国籍もまた、彼らにとっては大した意味をもつものではないのかもしれない。

タニグチさんの“国とか民族ではなく個人だ”という言葉が、彼らの人生を象徴しているように思う。ワタナベさん夫婦も、タニグチさん夫婦も、タカツ一家も、わたしが今回出会った全員に共通していることは、国家とか、民族、宗教などといった固定観念が一切ないことだ。たまたま、好きになった相手が、中央アフリカ出身だったり、マケドニア出身だったり、朝鮮にルーツを持つ人だったというだけで、ただその人“個人”を愛するという気持ちに対して忠実に、人生の選択をただけなのだ。それは、彼・彼女たちの育った環境が、そういう差別や偏見のない柔軟な考え方に少なからず影響しているとも言える。

私はロメオに会って、はじめて中央アフリカという国がどんな国かを知ったし、タニグチさんのご主人に会ってはじめて、マケドニアやアルバニアの歴史や文化を知った。北朝鮮籍の在日の人が、必ずしも北にこだわっているわけではないことも知った。そして、幸いにも、わたしが出会った8人はみな、非常に強く優しい魅力的な人だった。彼らとの出会いを通して、中央アフリカやマケドニアや、朝鮮半島に興味を持つきっかけとなり、そうした国々に対し、わたしは確実に以前よりも良いイメージを持っている。

そして、このようにさまざまな文化やバックグラウンドを持つ人々同士の国際結婚が増えることで、差別や偏見は少しずつなくなっていくのではないだろうか。なぜなら、人は知らないから差別をするのであって、個人を知ればそこに差別は生まれないと思うからである。